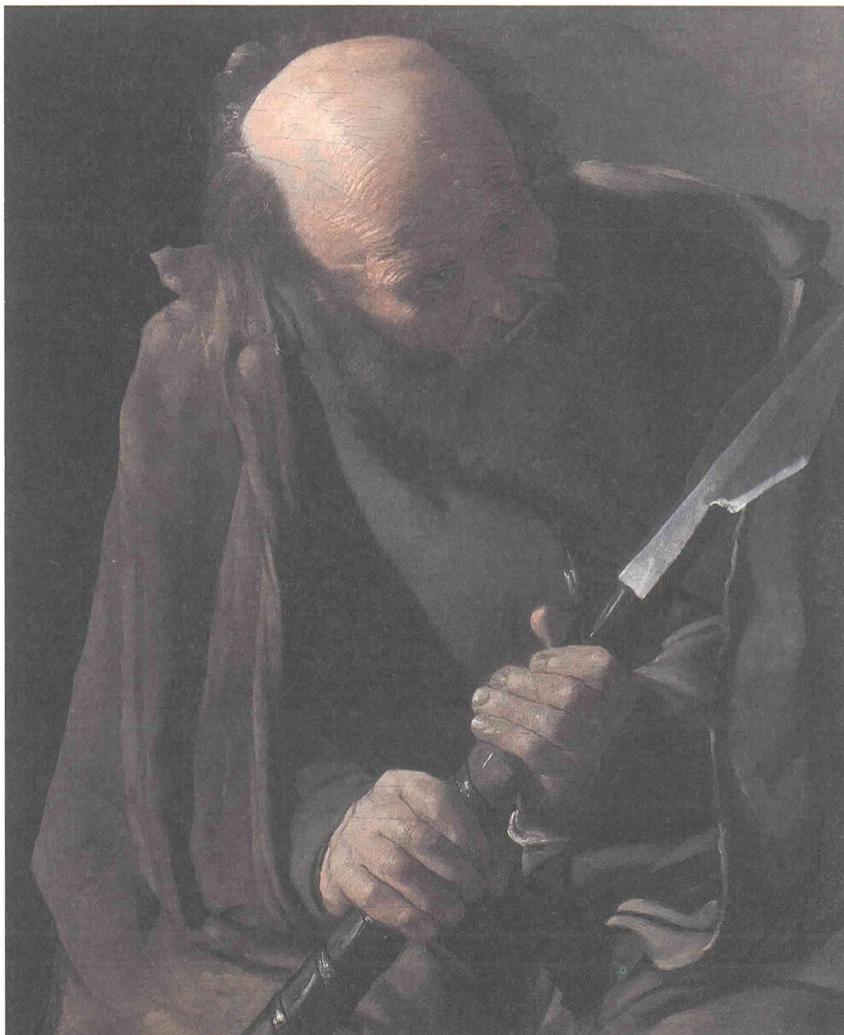


新収作品  
New Acquisitions



ジョルジュ・ド・ラ・トゥール [1593-1652]  
《聖トマス》

油彩、カンヴァス  
64.6×53.9 cm

Georges de La Tour [Vic-sur-Seille 1593 - Lunéville 1652]

*St. Thomas*

Oil on canvas  
64.6×53.9 cm  
P.2003-2

来歴/Provenance:

Discovered in a private collection in Albi in 1987; Paris, collection B. R.; Monaco, Vente Christie's no.155 (22 June, 1991); 梅田画廊、大阪/Gallery Umeda, Osaka; 石塚コレクション、東京/Ishizuka Collection, Tokyo (1991年9月/September, 1991); Auctioned at Christie's, London no.41 (10 December, 1993).

文献/Literature:

Rosenberg, cat.expo. *Musée du Louvre. Nouvelles acquisitions du département des peintures, 1987-1990*, Paris, RMN, 1991, p.80 ill.; Ramade, cat.expo. *Grand Siècle*, Montréal / Rennes / Montpellier, 1993, no.25, fig.2; Boyer, "Les Apôtres de Georges de La Tour de Paris à Albi," *Actes du colloque de Vic-sur-Seille, 9-11 septembre 1993*, 1994, pp.59-69; Thuillier, *Saint Jean Baptiste dans le désert*, Metz, éd. Serpenoise, 1995, p.15 ill.; Le Floche, *Le Signe de contradiction. Essais sur Georges de La Tour et son oeuvre*, Rennes, Presses universitaires de Rennes II, 1995, p.66, pl.31; Choné, *Georges de La Tour, Un peintre lorrain au XVIIe siècle*, Paris, Casterman, 1996, p.130 ill.; Faggiolo dell'Arco, cat.expo. *France in the Golden Age*, 1996, Londres, p.94 ill.; Cuzin, "Georges de La Tour, un caravagesque suspect, Réflexion à l'occasion de l'exposition à Washington," *Le Journal des Arts*, décembre 1996, p.22; Conisbee, cat.expo. *Georges de La Tour and his World*, 1996-1997, Washington / Fort Worth, no.8 ill., pp.8, 43, p.47 ill.; Cuzin, *ibid.*, p.198; Slatles, *ibid.*, pp.206, 215, no.36; Cuzin et Salmon, *Georges de La Tour, Histoire d'une Découverte*, Paris, Gallimard, coll. "Découverte," 1997, p.113 ill.; rééd. 2004, pp.113, 126.

展覧会/Exhibitions:

Paris / Monaco: *Exposition des œuvres les plus importantes devant être vendues par Christie's à Monaco le 22 juin 1991*, Paris 5 - 8 juin 1991, Monaco 20 - 22 juin 1991.  
London, *Pre-December 10 th Sale Exhibition* Christie's December 5 - 9, 1993.  
Washington / Fort Worth: *Georges de La Tour and His World*, National Gallery of Art, Washington, 6 October 1996 - 5 January 1997; Kimbell Art Museum, Fort Worth 6 February - 11 May 1997.  
Paris: *Georges de La Tour*, Galeries National du Grand Palais, Paris, 3 October 1997 - 26 January 1998.

「夜の画家」ジョルジュ・ド・ラ・トゥールに関して、ここでそのあまりにもドラマティックな再発見の歴史と、その美術史上の重要性について語るにはいささか紙数も足りず、またその場でもないため差し控えるが、少なくとも、その作品の絶対的な希少性に関しては指摘しておくことが必要と思われる。現在、真作と認められているものは40点に満たず、パリのルーヴルには6点の真作が所蔵されるものの、その他の美術館でこの画家のオリジナル作品を複数所有する所は僅かな例外(ナント、ナンシー、ヴィック、ベルリン、ニューヨーク)を除き、存在しない。その点では、まさに、同時代のオランダの画家フェルメールに比肩されるべきであろうが、フェルメールが比較的早く、19世紀にはすでに再評価を受けていたのに対して、ラ・トゥールの名が人々の口に上り始めるのは、ドイツ人美術史家ヘルマン・フォスによる初めての公式な形での言及以後、今世紀も半ば近くになってからのことであった。

本年度の購入作品《聖トマス》は、来歴の項を参照すればわかるように、まさしく、こうした再発見史の最も新しいページを飾る作品で、その存在が世に知られたのは僅か十数年前の1987年のことである。さらに1991年に競売にかけられた後、大阪の画廊を通じて東京の石塚氏のコレクションに入ったまま、ほとんど一般には知られることのなかった稀有な作品である。

よく知られているように、ラ・トゥールの作品には同主題、同構図のコピーも含め、画家以外の手になるさまざまなヴァリエーションも多い。しかし、この作品の真贋に関しては、ラ・トゥール研究者として非常な権威をもつ Pierre Rosenberg (前ルーヴル美術館館長)、Jean-Pierre Cuzin (フランス美術史学会副会長、前ルーヴル美術館絵画部長)、Jacques Thuillier (国立コレージュ・ド・フランス名誉教授、元フランス美術史学会会長)の3氏が、さまざまな機会を通じて真筆と認めており、筆者もまた、キュザン、テュリエ両氏からは直接口頭でその考えを聞き、その確信に近い判断をあらためて確認した。<sup>11)</sup>

ところで、ラ・トゥールに関する最新の研究はほぼ、1997-98年のパリ、グラン・パレにおける展覧会カタログに集約されている。本作品もこの展覧会に出品されたことで初めて一般の人々の目にも触れ、個人コレクションに入っている初期の知られざる真作として注目を集めたのである。カタログによれば、本来この作品は、キリストと12使徒を描いた13点の連作中の1点で、他の作品とともにパリ在住の司教 François de Camps (1643-1723) のコレクションにあったとされ、彼によって南仏アルビの司教座参事会員 Jean-Baptiste Nualart (1694年没) に贈られた。さらに当地の大聖堂カテドラル・サント=セシルに遺贈された。その後、1698年3月8日の記録 (*Procez verbal de la visite à l'église métropolitaine et du chapitre d'Alby en 1698 et 1699 par archevêque Charles le Goux de la Barchène*) に公式に言及されている。それによれば、キリストと12使徒を描いた13点の作品が、アルビのカテドラル・サント=セシルの内陣にある6番目の礼拝堂に掛けられていた。また、1795年の大革命による貴族・教会財産の接収 *saisies révolutionnaires* に際しても、それらの作品は同じ場所に留まっていたことが、知られている。そしてそこには、次のような興味深い記述が見られる。「対をなすサン・ジャン礼拝堂には、ブッサンに基づく福音書記家の聖ヨハネの絵と、その周りには12点の肖像画大の小さな12使徒の絵が掛かっている。[良く知られ、賞賛された画家]ミケラン

ジェロ・カラヴァッジョに似た強い筆致の暗い作品である(原文ママ)」。しかし、その後、19世紀のアルビのカテドラルに関する記録からは消息は全く消え、アルビの市立美術館に収蔵された時には連作はすでに2点を欠き11点になっていた。戦後間もない1945年にこの連作はパリに運ばれ、修復、調査を受けた。そして美術史家ルネ・ユイグによる、この連作に関わる最初の研究論文が翌年発表されている。

結局、現在まで残る真作は5点となる。アルビの美術館に収められた「祝福するキリスト」を含めた11点の作品のうち9点が古いコピーであり、残る2点《聖ユダ(タダイ)》、《聖小ヤコブ》が真作である。ほかの2聖人「聖バルテレミー」と「聖ヨハネ」に関しては、模作も真作もまだ発見されていない。また9点の模作中では、《聖ピリポ》(1941年に発見。現在ノーフォーク、クライスラー美術館所蔵)、《聖アンデレ》(旧M.Franceコレクション。1991年、Sotheby's, Monacoで競売。現在個人蔵——ヒューストン美術館寄託)、そしてこの《聖トマス》(本購入作品)という、3点の真作が近年あい前後して新たに発見された訳である。

この絵の主題は言うまでもなく、キリストの12使徒のひとりで、インドへ伝道に赴き、異教の人々に槍で突かれて殉教した聖トマスを表わしている。ひげを蓄えた壮年の人物として描かれた聖人は、その持物である槍(十字架上でローマ兵の槍に突かれて絶命するキリストの隠喩でもある。キリストの復活の際に、トマスはそれを疑い、脇腹の槍傷を触って確かめるといふ聖書中の記述とも関係づけられる)を手にしている。ルーヴルには同じ主題を描いた作品が所蔵されるが (*Saint-Thomas à la pique* 1632-1635?)、この作品とは制作年でほぼ10年程の隔りがあり、当然のことながら表現もまた、異なっている。ルーヴル作品の洗練された作風に対して、購入候補作品においては、表現はより荒々しく、直接的な印象を与える。しかしながら、ラ・トゥールの真作のみに共通する、幾何学的に単純化され、しばしば苛烈なまでにデフォルメされた形態、皮膚の皺一本一本まで克明に描写する「ヴェリスム」、カラヴァッジョの影響から発し、ラ・トゥール独自の形態感を特徴的に示す光の取り扱いなどは、どちらにも共通した特徴といえる。

しかしまたこの作品は、同じ12使徒連作中の今に残る真作と比べても、また、失われた真作のよすがを伝えるアルビのコピー作品と比べてみても、きわめて個性豊かな1点であることも間違いない。ひげを蓄えた髪が薄い、堅固な額をもつ無骨な老人の類型は初期を中心に多くのラ・トゥールの作品に登場するが(版画によって伝えられている失われた作品《悔悛する聖ペテロ》、《手紙を読む聖ヒエロニムス》[ロンドン、ハンプトン・コート]、《辻音楽士たちのけんか》[ゲッティー美術館])、本作品の老人像は最も力強く、精神性に富む。12使徒連作の聖人像は、基本的にはいずれも静かな、瞑想的な人物描写がなされているが、《聖トマス》のみは、苛烈で表現主義的ともいえる独特のバロック的動性を見せている。

通常、宗教主題の作品は、蠟燭の炎を通して「夜」の闇を精神性豊かに表わした、いわゆる「夜 nocturnes」の作品系列に属している。それに対して本作品は画家の最初期の宗教画でありながら、レアリスムの勝った風俗画の多い「昼 diurnes」の作品に分類され、その点

においても貴重な存在である。従兄弟ふたりをフランチェスコ派の修道士にもち、対プロテスタント圏の最前線として、対抗宗教改革の渦中にあったロレーヌ公国で生涯の大半を送ったこの画家にとって、宗教主題はその芸術の本質的な部分を占めていた。トレント宗教会議（1545-1563）以降のカトリック圏における、「貧者の聖書」としての宗教画像の必要性は深く、ラ・トゥールの生涯と制作の謎に反比例するように、この画家のレアリスムに付随するある種の「視覚的明快さ」は際立っている。この《聖トマス》の場合も例外ではなく、キリストの復活の否認と遠隔の地での殉教という矛盾と苦悩を背負った聖人の運命的な性格が、その粗末な身なりと挑戦的な眼差しを通して、直截に表わされている。「告解 pénitence」や「堅信 confirmation」といった秘蹟を、夜の闇と光の対照に託す手法により神秘性を増す一連の「夜」の作品とは、まだ一線を画している。

作品の状態に関しては、フランス美術館調査保存センター Centre de Recherche et de la Restauration des Musées de France が東京・国立文化財研究所の協力を得て実施したデジタル・アーカイヴ計画の中で記録を採っている（情報は非公開）。非公式に知り得た情報から判断するに、アルビに現存する真作2点のうち《聖小ヤコブ》はかなりの昔に、プレパレーションの部分と表面の絵具を残してオリジナルキャンバスを取り除き、新しいキャンバスに載せるといって、現在では過去のものとなった手法で修復がされている。また、《聖ユダ（タダイ）》には新たにライニングが施されている。それに対して本作品《聖トマス》は、結論的に言えば、裏打ちがされているもののオリジナルのキャンバスに大きな痛みはなく、X線観察下では絵具層の欠損部分が認められるが亀裂は少なく、良い状態を維持している。また、紫外線写真および肉眼で見た限りも、人物の頭部右側を中心に槍や手などに補筆の跡が相当に見受けられるが、この時代の古画としては常識的な許容範囲に収まっているというのは、前述のラ・トゥール研究者たちの一致した意見でもあった。

以上、簡単に作品の内容と状態の報告を述べたが、国立西洋美術館における17世紀絵画のコレクションはまだ十分とは言いがたく、ましてやこの時代のフランス絵画には、クロード・ロランとフィリップ・ド・シャンパーニュの佳品を除けばあまり見るべきものはない。その意味で、久々の17世紀フランス絵画の購入が、きわめて希少なジョルジュ・ド・ラ・トゥールの作品を通して行なわれたことは、それ自体、千載一遇の機会であったと思われる。

また、2005年3月-5月の「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展」の開催もまた、その発想自体をこの作品の購入に直接負っているということも、是非付け加えておかなければならない事実である。（高橋明也）

There is not adequate space in the present forum to review both the history of the dramatic rediscovery of Georges de La Tour, known as the “painter of the night,” or to fully discuss his importance in the history of art. At the very least, what must be stated here is the fact of the absolute

rarity of Georges de La Tour’s extant works. Today less than 40 works are acknowledged as by La Tour’s own hand. The Louvre in Paris numbers six genuine works in their collection, and a few other museums hold at least one work, including museums in Nantes, Nancy, Vic-sur-Seille, Berlin, and New York City. While this issue of rarity makes comparison to La Tour’s Dutch contemporary Vermeer seem obvious, it must be noted that while Vermeer had already been re-approved by the art world by the 19th century, La Tour’s name was not known in the modern world until Herman Voss’s first publication of La Tour in almost the mid 20th century.

The canvas of *St. Thomas*, purchased by the NMWA during this fiscal year, is the latest page in this history of La Tour’s rediscovery, as can be seen by a glance at the provenance listing above. The world only learned of its existence a little over 10 years ago in 1987. Then, after its auction in 1991, the work passed through an Osaka gallery into the hands of the Ishizuka collection in Tokyo, where it remained generally unknown by the public.

As is well-known, there are many extant variants of La Tour’s works by other hands, including those with the same subjects and compositions seen in La Tour’s signature works. The authenticity of the new NMWA acquisition, on the other hand, has been confirmed by three authoritative voices in the field of La Tour studies, namely Pierre Rosenberg (former director, Louvre), Jean-Pierre Cuzin (former chief curator, paintings department, Louvre) and Jacques Thuillier (professor emeritus, Collège de France). The author has also had direct oral discussions with Cuzin and Thuillier on the subject of the authorship of the new NMWA work, and in both cases the scholars repeatedly confirmed its authenticity.

However, almost all of the latest research on La Tour is concentrated in the exhibition catalogue for the 1997-98 exhibition held at the Grand Palais in Paris. The NMWA work was included in that exhibition, its first public display. Attention focused on the work as an early period unknown work then in a private collection. According to the Grand Palais exhibition catalogue, the work was one painting from a series of thirteen canvases depicting Christ and his twelve disciples. The NMWA canvas and the other works from the series were said to have been in the Bishop François de Camps (1643-1723) collection in Paris. De Camps stated that he had been given the works by canon Jean-Baptiste Nualart (d. 1694) of Albi. These works were bequeathed by De Camps to the Saint Cecilia Cathedral of Albi. Then later, the series of paintings was publicly noted in a document dated to March 8, 1698, the ‘Procez verbal de la visite à l’église métropolitaine et du chapitre d’Alby en 1698 et 1699 par archevêque Charles le Goux de la Barchène.’ According to the document, the thirteen works depicting Christ and his twelve disciples were hung in the 6th chapel of the nave of Saint Cecilia Cathedral, Albi. It is also known that these works were still in that same location during the 1795 seizure of assets of aristocrats and churches during the French Revolution. A fascinating notation on these works can be found from that date: “À la chapelle qui fait pendant, dite de Saint-Jean, on y voit un Saint Jean l’Évangéliste d’après Le Poussin et autours douze petits tableaux grandeurs de portrait représentant les douze apôtres d’une touche forte et rembrunie comme celle de Michel-Ange Caravage [peintre connu et estimé].” However, all mention of the portraits is missing in 19th century records of the cathedral in Albi, and by the time the set of twelve paintings came into the collection of the Albi municipal art museum two works were missing from the set of one Christ image and 12 disciples. This meant that only 11 paintings entered the museum collection. In 1945, almost immediately after World War II, the paintings were taken to Paris where they were restored and surveyed. In 1946, the first research article on the series was published by art historian René Huyghe.

Today, five of the original Albi twelve apostle pictures remain extant. Nine of the eleven works (including *Blessing Christ*) today in Musée Toulouse-Lautrec in Albi are old copies. The remaining two works, *St. Jude Thaddeus* and *St. James the Lesser* are originals by La Tour. Two other saint images from the original Albi set, namely the paintings of

Saint Bartholomew and Saint John, have not been discovered in either original or copy form. Three originals of works among the nine copies in the Albi museum have been discovered in recent decades, including the newly acquired NMWA canvases, and *St. Philip* (discovered in 1941, today in the Chrysler Museum, Norfolk) and *St. Andrew* (former M. France collection. Sold at auction at Sotheby's Monaco in 1991. Presently on loan to the Museum of Fine Arts, Houston).

Needless to say, the new NMWA canvas depicts an image of one of Christ's twelve disciples, St. Thomas, who carried the teachings of Christ to India where he was martyred by non-Christians who stabbed him to death with spears. St. Thomas, shown here as bearded and in the prime of life, holds a spear in his hand. The spear alludes to Christ on the Cross being stabbed by Roman soldiers. This image is also related to a scene described in the Bible in which Thomas, questioning that it really was Christ after his resurrection, touches the spear wounds on Christ's side to confirm that it was his master risen. The Louvre has another painting by La Tour of this same subject (*Saint-Thomas à la pique*, dated to 1632-1635?). The NMWA canvas, on the other hand, dates approximately 10 years after the Louvre work. In contrast to the refined style of the Louvre work, the NMWA canvas has a rougher expression, a more frank and direct mood. Yet, the Louvre work and the NMWA work share with all other La Tour original works a geometric simplification, at times almost severely deformed shapes, and a sense of 'verisme' created by the artist's clear, individual depiction of each wrinkle on the saint's skin. These aspects reveal Caravaggio's influence while also indicating how La Tour depicted his own unique formative expression in his own distinctive light handling. Comparison of the NMWA *St. Thomas* with the other original works from the same series of twelve disciples, and indeed comparison with Albi copies that convey the imagery of now lost originals from that set, reveal that *St. Thomas* is undoubtedly an extremely individualistic work within the set. While most of La Tour's early works show a thin, bearded, firm-browed, older man facial type – like those seen in *Repentant St. Peter*, a lost work known through printed versions, *St. Jerome Reading*, which is either a contemporary variant or a copy today in the Louvre, and *The Musicians' Brawl* in the Getty Museum – in the case of the NMWA *St. Thomas*, the older man is shown as powerful and full of spiritual strength. The series of twelve disciple paintings fundamentally show quiet, meditative figures. Only *St. Thomas* reveals a stern, expressionistic quality that can be called a distinctive form of Baroque energy.

This work is also important as a rare example of an early period religious theme that can be grouped with La Tour's *diurnes*, or day time works. Images in these works are generally depicted in a realistic style and are genre motifs in subject matter. Such daytime scenes are contrasted with the group of night scenes by La Tour, known as his *nocturnes*, whose candle-lit night scenes exude a rich sense of spirituality. La Tour's two brothers were Franciscan monks, and La Tour himself spent most of his life in the Duchy of Lorraine, the frontlines of the Counter Reformation movement combating the protestants in Germany. Hence it is no surprise that the majority of La Tour's arts were religious in subject matter. In the Catholic countries after the Council of Trent meetings (1545-1563), there was an increased need for religious subject paintings as a form of 'poor man's Bible.' Almost in inverse proportion to the mysteries that surround La Tour's biography and his oeuvre, he revealed a striking degree of 'visual clarity' as part of his realism. The *St. Thomas* work is no exception. The fated character of this saint, whose life of contradiction and suffering included doubt over Christ's resurrection and martyrdom in a faraway land, can be directly sensed through his rough figure and strategic gaze. This directness further separates the NMWA *St. Thomas* work from La Tour's *nocturne* works, filled with a sense of penitential and confirmation sacraments, and made all the more mysterious by his contrasting manmade light with the darkness of night.

Regarding the state of the NMWA *St. Thomas* canvas, with the cooperation of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, the Centre de Recherche et de la Restauration des Musées de France has taken records of this work as part of its Digital Archives

program (Information not released to the public). Judging from information not made available to the general public, at some time considerably long ago the preparation level and surface paints of the painting of *St. James the Lesser*, one of the two extant original works now in Albi, were removed from the original canvas and transferred to a new canvas. Further, the *St. Jude Thaddeus* work has been given a new lining. Conversely, the lined original canvas of the NMWA *St. Thomas* has no major damage and x-ray examination reveals that while damage and missing areas can be seen in the paint layer, the crackling is minimal. It can be said that the work has been maintained in a relatively good state. Further, judging from ultraviolet photography and examination by the naked eye, a considerable amount of later brushwork can be seen on the right half of the figure's head, and also on the spear and hand. The La Tour scholars mentioned above unanimously agree that this level of retouching is within the normally acceptable range of such work on paintings from this period.

The above is a simple description of the subject matter and state of the NMWA *St. Thomas* painting. Needless to say, the 17th century French painting collection of the NMWA is far from complete, to the degree that with the exception of masterpieces by Claude Lorrain and Philippe de Champaigne, very little is noteworthy. In this sense, this purchase was made all the more an unusual event by the fact that it involved one of the extremely rare works of Georges de La Tour.

It must also be noted that the acquisition of this work became the direct impetus for the NMWA to hold a *Georges de La Tour* exhibition from March to May 2005.

(Akiya Takahashi)